



図書館見学記

会誌編集部

アカデミーヒルズ （六本木ライブラリー）



アカデミーヒルズ六本木ライブラリーは六本木ヒルズ森タワー 49 階にある会員制の図書館である。眼下に東京の都心を望む“天空の書齋”といったところだ。

49 階のエレベーターの扉が開き、まず見えてきたのが東京タワー。見学させていただいた日はあいにくの曇り空だったが、壁一面に広がる景色と開放感はリユクスの気分には申し分のないシチュエーションである。そして、フロア全体に並べられた閲覧用のテーブルには、PC を持ち込んで作業をしている人、雑誌を片手にコーヒーを飲んでいる人、友人とランチタイムを楽しんでいる人など思い思いにこのスペースを利用しているようであった。2009 年 7 月現在、会員数は 3,200 名程度。

開館して今年で 5 年目になるそうだが、この 1 年間で会員数は例年に比べて増加傾向にあるらしい。2007 年よりスタートした講演会「ライブラリートーク」や、会員同士のコミュニケーションの場である「メンバーズコミュニティ」が人気を博し、口コミで会員数が増加していっ

たそうである。アカデミーヒルズ六本木ライブラリーは、本を通して会員たちに社交の場を提供することをいちばんの目的としており、人脈づくりの一助となれば、とのことであった。

蔵書はビジネス書が大半を占める。しかも、これら蔵書の貸出はしておらず、気に入った本はその場で購入が可能である。また、図書館なら必ず行っている分類もされていない。これは、本を探しているうちに新しい発見をしてもらうため、あえて主題別での配架作業をしていないのだそう。選書や企画は元慶應義塾大学教授の渋谷雅俊氏や、経営コンサルタントの方が担当されている。サラリーマンをターゲットにしているのも、ビジネス書の他には啓発本やアート書などが多いように思われた。企画や展示にも利用者の目をひくようなものが考えられており、中でも著名な知識人の本棚を再現したコーナーは興味深かった。これは、立花隆氏や楡周平氏などがプライベートで読んだ本を本人から聞き出して、それと同じ本を並べている本棚である。こちらは定期的に更新されるので、彼ら

の興味や好奇心を追体験することができる。また、ビジネス書や話題書とは別に設置されている「great books library」は名書と呼ばれる本や、時代を超えて影響力のある本が並べられている。その中には六本木に自宅を構えていた橋本龍太郎氏のご家族から寄贈された本も多数並んでおり、手にとって読むことができる。

前述したように、アカデミーヒルズ六本木ライブラリーは会員制の図書館である。利用時間は7:00から24:00までで、仕事帰りにゆったりとした時間を過ごせるよう遅くまで利用が可能

だ。天空の書齋で本と夜景を楽しむひとときはいかが。(若杉 亜矢)

【アカデミーヒルズ六本木ライブラリー】

住所：東京都港区六本木6丁目10番1号

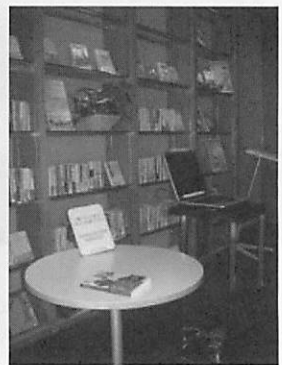
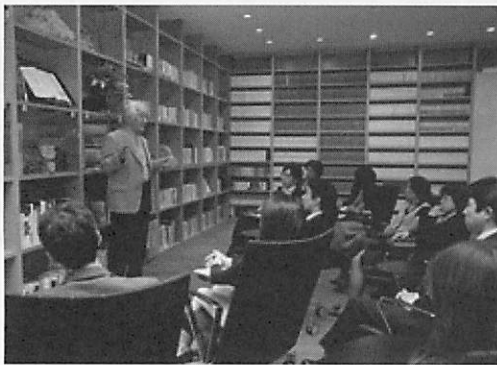
六本木ヒルズ森タワー49階

電話：03-6406-6650

無料見学会や、2,000円で平日1日を利用できるワンデーチケットもある

ウェブサイト：

<http://www.academyhills.com/library/>



大宅壮一文庫

いしいひさいちという漫画家はいっさいわれわれの前に姿をあらわさない。ウィキペディアによると、「極端なマスコミ嫌い・人嫌いで、顔



写真が公開されたのは80年代に一度だけ『週刊文春』に露出したのみ。『となりの山田くん』映画化時は記者会見に出ないということが映画化を許諾する際の条件だった」とある。『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』を見ると、これだけの文章から、いしいひさいちのたった一枚の顔写真に簡単にたどりつけてしまう。国立国会図書館の『雑誌記事索引累積索引版』ではこうはいかない。このような記事を探すようにはできていないし、そもそも『週刊文春』が収録され始めたのが1996年途中からである。たとえこの記事が収録対象年に入っていたとしても、この記事は内容的にデータ化されないだろう。『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』は独自の分類法に従っているがこれが実用的であり、しかも一冊の雑誌から30~100もの索引データを作成し

ている。いしいひさいちの素顔はともかく、通俗的な雑誌であるからといってその価値が低いと思う人はもはや少ない。大宅壮一は「すぐに忘れられるもの」を集めるべきだと言ったというが、今では年間10万人が訪れるという大宅壮一文庫の存在価値を際立たせているのは、その収集方針と索引の有効性である。

私たちもそんな大宅壮一文庫を訪れたのだが、実際に見学させていただくと、そこにあるのは本当に素朴な図書館だった。「素人の考えでつきぬけてきた」と私たちを案内して下さった方がおっしゃっていたが、閲覧や利用の仕方は本当に昔ながらのものであるし、索引データの作成やWeb化も大宅文庫単独で行い、家内制手工業といった趣だ。なにより雑誌資料の保存環境はおせじにもいいとは言えない。基本的に資料は製本されないし、書庫は古く建て増しされた民家であり、窓からは陽がさしこむ。その窓枠もさびて朽ちてきている。書棚は急速に増殖していく資料の波に追いつけず、空いている棚に分散して置かれ始めたりしている。

経営的には「とりあえずやっていけている」とのこと。何せ私立図書館である。資料に関しては、多くの雑誌を出版社から寄贈でいただいているそうであるが、どこかの援助を受けているということはないという。資料の保存やスペースに関して、近い将来大きな転換点を迎えることになると思うが、そのときに対応できるのか心配になる。この図書館がなくなるようなことがあれば、失うものははかりしれない。

お話を伺って感じたのは、ここの職員の熱意である。休日には古本屋巡りをして、所蔵雑誌の欠号を探す人がいるというが、自分の職場を



愛しているのがわかる。正職員は12~3名で、基本的にアルバイトからはじめて、実力をつけて職員になった人が多いとのことである。システムの成熟した図書館組織が失ったものがここにはあふれている。人がもとめる資料を提供するために奮闘している大宅壮一文庫の職員たちを見て、図書館員の原点を見る思いがした。

(増田 徹)

【大宅壮一文庫】

住所：東京都世田谷区八幡山3丁目10番20号

開館時間：10:00~18:00

閲覧受付：17:15まで

複写受付：17:30まで

休館日：日曜日・祝日・年末年始

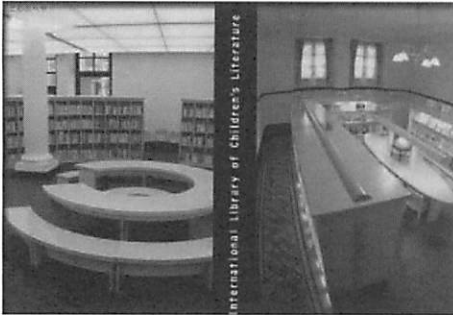
電話：03-3303-2000

入館料：300円（税込）

ウェブサイト：

<http://www.oya-bunko.or.jp>

国立国会図書館国際子ども図書館



国立国会図書館国際子ども図書館は、国内外の児童書とその関連資料に関する図書館サービスを国際的な連携のもとに行うため、2002年に全面開館したわが国初の国立の児童書専門図書館だ。「子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く」という理念に基づいて、子どもの読書環境・情報提供環境の整備のために活動を行っている。

建物はルネサンス様式の代表的な明治期洋風建築で、1906年に建築された旧帝国図書館を改修したものである。1999年に東京都選定歴史的建造物の指定を受けており、改修にあたっては意匠や構造を最大限に保存するための工夫が凝らされている。西側の外壁にガラス製の箱型建物を継ぎ足してエレベータや階段を設けたり、床を数十センチ底上げして配線を取納したりエアコンを設置したりするなどして、近代的な設備を設けている。免震工法も用いられていた。

地下1階、地上3階建てであり、1階は子どもを対象にしている。2階に資料室と研修室、3階には子どもの本に関する展示会を行う本のミュージアムとホールなどがあり、ホールでは終日館内の案内ビデオが流れていた。

館内は全体的に天井が高く、漆喰塗りの白い壁に華奢なシャンデリアの照明があたって、部屋全体がやわらかい光で包まれている。柱や扉、装飾品、什器類はほとんどが濃茶色で、壁の白色とのコントラストが印象に残った。使い込まれてすり減った石の階段や濃い茶色の手すり

そのデザイン、窓から見える緑の木々なども眺めていると、図書館というよりは迎賓館にいる気分になる。書架は場所によって濃茶色か白木色で使い分けられている。子どもの部屋やミュージアムでは白木色の書架や什器を配し、さらにそれらの作りが曲線を多く用いているため親しみやすく柔らかな印象の部屋である。利用を18歳以上に限っている資料室は濃茶色の書架や什器、直線的な書架を用いて厳粛な印象を受けた。各資料室の入口にはカウンターがあり、必要事項を記入した利用券を入館バッジと引き換えて入室する。

普段親しんでいる絵本がさまざまな外国語版になっていることや、「星の王子さま」の本が30種類弱並んでいることに気づいて驚いた。外国人を数人見受けたこと、学生と思われる利用者が資料室で勉強している姿を見て、ここは児童書のナショナルセンターという役割を持った施設なのだと感じた。

子どもの部屋は天井を低くし、全面にパネル照明をつけてあった。円形のテーブルと椅子のほかに、一人掛けの椅子がある。サイズは2種類用意されていて好みの椅子に座ることができる。

今回は平日の閉館時間間際に訪問したせいか子どもの利用者に会うことはなかった。いつもは賑やかな子供たちも、きっとここでは静かに腰かけて、丁寧に本を選び、読むのだろう。

(寺澤 裕子)

【国立国会図書館国際子ども図書館】

住所：東京都台東区上野公園 12-49

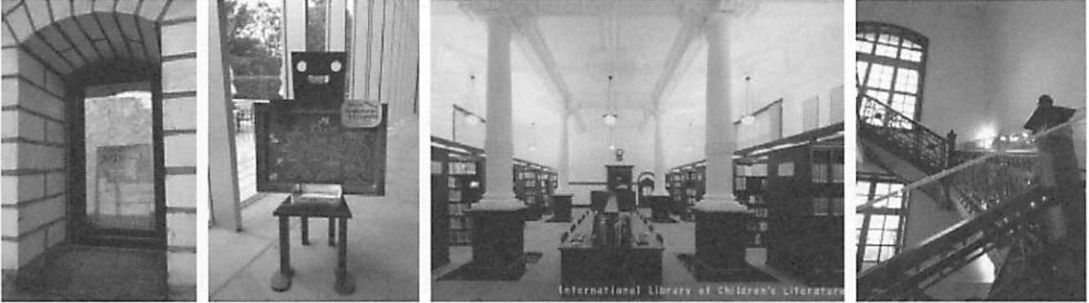
電話：03-3827-2053（代表）

開館時間：午前9時30分から午後5時まで

休館日：月曜日、5月5日を除く国民の休日・
祝日、年末年始、第3水曜日（資料
整理休館日）

ウェブサイト：

<http://www.kodomo.go.jp>



千代田区立千代田図書館



千代田区立千代田図書館は「千代田ゲートウェイ」「創造と語らいのセカンドオフィス」「区民の書齋」「歴史探究のジャングル」「キッズセミナーフィールド」という5つの機能コンセプトを持った、千代田区役所9-10階にある公共図書館である。

9階は2つのゾーンに分かれていて、1つは「区民の書齋」と呼ばれる一般書架ゾーン。リラックスをして読書や学習をしてもらえるように、ゆったりとした空間となっている。例えば、ここに設置されている書架の高さは「大人の男性の顔の高さ（約160cm）」と低く、幅は「椅子+人一人分」と広くとられている。確かに全くといっていいほど圧迫感はない。

またこの一般書架ゾーンには、この千代田図書館最大の特徴でもある「コンシェルジュ」のいるコンシェルジュブースがある。この「コンシェルジュ」は千代田図書館の総合案内だけでなく、千代田区の施設や地域案内もしてくれる、いわば千代田区の「広報係兼フロント係」だ。例えば、千代田図書館ガイドツアーや利用者への館内案内、本の所在探しだけでなく、地域周辺のおいしいお店の紹介などもしてくれる。

もう1つは「セカンドオフィス」と呼ばれる調査研究ゾーン。ここは名前のとおり小さい“個人オフィス”のような作りになっており、PCを持ち込んで作業ができるように電源とネットワーク設備が完備され、このゾーンと個

室になった研修室では無線 LAN が使用できるようになっている。また集中して調査・研究ができるようにキャレル席（個人ブース席）も用意されており、ビジネスゾーンらしく携帯電話が使用できるスペースもある。ここに配架されている資料はビジネス書が中心で、情報探索コーナーには調査専用の PC があり、インターネットやオンラインデータベースが利用できる。

その他、所蔵している貴重書や千代田区と関連した企画展示などを行っている「展示ウォール」や神田古書店連盟との連携展示コーナーで展示書籍は購入もできる「としょかんのこしょてん」などがあり、図書館全体が「千代田区のバックアップ」をしているように感じられた。

10階は2007年のリニューアルの際にアートディレクターと当時の区内の小学生が共同制作した「光壁」のある、そんな暖かみのある空間である。

児童書や紙芝居が取り揃えられたスペースには、授乳室やおむつ替えのできるトイレも設置され、区民限定ではあるが「こどもひろば」では一時的に子どもを預かってくれるサービスも行われており、親も安心して図書館へ訪れることができるようになっている。

また「子ども室」と呼ばれる部屋はソファが置かれ、床面も靴を脱いで直に座って親子で一緒にゆっくり本と触れあえるように、安全で温かいコルクづくりになっており、定期的な「おはなし会」という絵本の読み聞かせも開催されている。

その他、大変驚いたのは「千代田 Web 図書

館」だ。これは利用が千代田区内在住、在勤、在学の人に限られるが、Web 環境があれば蔵書検索から電子図書の貸出・返却ができるというものである。1タイトル基本3人までは同時に借りること（つまり Web 上で閲覧）ができ、2週間の貸出期間中はいつでも閲覧できる上、個人の ID でログインすれば書き込みもできるそうだ。この書き込んだデータはハードディスクに保存されるため、次の人が借りても書き込んだデータは表示されず、自分が再度借りれば書き込んだデータは前回借りた（閲覧した）際に使用したパソコンからのログインに限り、表示されるようになっている。恥ずかしながら、すごい世の中になったもんだと感動してしまった。

『さあ、図書館へ行こう』…そんなキャッチフレーズがぴったりな、魅力的な図書館だった。

（松尾 知香）

【千代田区立千代田図書館】

住所：東京都千代田区九段南 1-2-1

千代田区役所 9・10F

開館時間：10:00～22:00（月～金）

10:00～19:00（土）

10:00～17:00

（日・祝・12月29日～31日）

休館日：第4日曜日・1月1日～3日

特別整理期間

電話：03-5211-4289・4290

ウェブサイト：

<http://www.library.chiyoda.tokyo.jp>

<http://mobile.library.chiyoda.tokyo.jp>

（携帯電話）

